

「誰一人もおいていけない 授業」

小田原市立酒匂中学校

三年 大野 紗那

どうしたらこの世から犯罪や非行が減るの
だろうか。このことについて私は「誰一人も
おいていけない授業」を基に考えてみた。

「誰一人もおいていけない」これは、私が
小学六年生の頃、授業の中でクラス全員で大
切にしてきた言葉だ。「誰一人もおいてい
かない授業」とは、クラスの中で一人でも分か
らない、できないという人がいたら、どこが
分からないのかを皆で考え、皆で話し合い、
皆で解決していくという授業のスタイルだ。
その話し合いの中で出てきた間違いに対して、
「それは違う」と頭ごなしに否定するのでは
なく、「どうしてそう思ったのか」「なぜそ
う考えたのか」を皆で話し合うことで、間違

えた理由を理解することができ。間違いの原因を理解することで、同じ失敗を繰り返すことが減り、考える力も少しずつ育っていく。そして何より、発言をすること、授業をすることがどんどん楽しくなっていくのだ。そんな「安心感」や「話しやすさ」そして苦勞して正解にたどり着いたときの「達成感」や「喜び」、仲間と共に学び、支え合うことの大切さを感じられる授業。それが「誰一人もおいていかない授業」だ。

私は、この授業で感じられるような安心感や話しやすさ、仲間との信頼を学校の中だけでなく、社会全体にも広げていくことができれば、犯罪や非行はもっと減るのではないかと考えた。なぜなら、もし誰かが犯罪や非行に走りそうになったときに、相談できる仲間や信頼できる人がそばにいれば、きっとその人は別の道を選ぶことができるからだ。そもそも、なぜ人は犯罪や非行に走ってしまうのだろうか。私は「孤独」や「不安」そして

「理解されない苦しみ」から来るものだと考えている。悩みや苦しさを誰にも打ち明けられない。打ち明けても「そんなの気のせいだ」「お前が悪い」と否定されるかもしれない。そういった恐怖や不安があると、人はどんどん孤立していき、誰にも頼ることができず、間違った選択をしてしまうのではないだろうか。だから私は「誰一人もおいていかない」という考え方を、学校だけで留めるのではなく、社会全体に広めていくことが大切だと思う。誰かが困っているとき、悩んでいるときに、すぐそばで「どうしたの?」「一緒に考えよう」と声をかけてくれる人がいる社会。間違ってしまったとしても、その理由と一緒に考えてくれる社会。失敗しても、そこから共に修正し正解にたどり着けるようにしてくれる人がいるような社会。そんな明るく、温かい社会であれば、きっと多くの人々が救われるし、犯罪や非行も減っていくのではないだろうか。

私は「誰一人もおいていけない授業」で学んだことを、これからも大切にしていきたい。そして、そんな考え方が少しずつでも多くの人に、社会に広がっていくことを願っている。安心し、信頼し合えるような明るい社会をつくっていくために、私たち一人ひとりができることを考え、行動していくことが大切だと思った。

ほんの些細な会話や、たった一言が、誰かの未来を変えるかもしれない。「誰一人もおいていけない」という意識を持つだけでも、社会はきっと明るくなる。そう信じて、私は今日も誰かと会話する。